



松齋吟光画

金松堂梓

下



第二編

中



多聞風世西洋之床

櫻雨園主人著

上

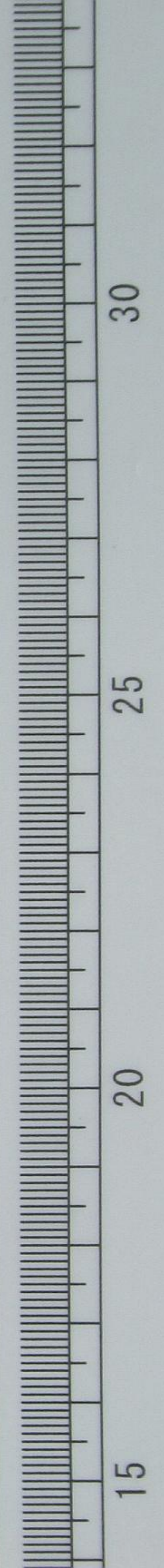
25 30 35 40 45 50 55



聞多風流
西
洋
床

櫻雨園主人著

上



西洋^{セウヤウ} 狂^{キヤウ} 編^{ヘン} 症^{シヤウ}

上之卷

櫻雨園著

松奇画

金松堂梓



< 48-8393 >

聞多風流西洋床二編之叙

花鳥のつら音ゆりき。春のゆいべ。一杯機嫌は筆と採り。西洋
床の初編を綴り。始めを梓と上せしめ。幸よしと御見捨なく。二日酔
の呑と直し。又二編と音信し。山時鳥の初音と聞き。若葉を分

てる窓の下よ。首と捻りと研むむらひ。工風と凝まらげ鉢巻。
ヤツト趣向と立花のむらひ絶へて眼みも観ぬ。時勢と連て

流行のかさると的矢庭と作文。固より脚色は滑稽よ
工根も葉もゆらぬ。笑草。摘りたぬをんか子さる方の御伽
草紙とあるなり。是を作者の幸福あるべし

明治十四年
五月の出版

櫻雨山人春輔誌





西洋房工

要石如馬の

神のらうらう

あすな味縁の

らやまゆき

は

櫻雨園

戯吟



聞多風流西洋床二編上

東京

櫻雨園主人戯著

茲又又後桃優市門園多昂へ獨火流の行傍よ煙まらぬ
 らし居る如へ復ゆや来る一個あり送り藝技屋の抱主
 うと年のはし十條り埋髪天窓と奇舞よるを付眉毛
 の覆きて毛きんだら若みむ一巨一男ま人表付けの小
 蛇の重ね表あるとどを仕立ちげといふまあるを上げ
 るよ黒天の半襟とうけし紙ん種をんとん煙草入の
 初野は浪頭は大方の組み浪文表せあひ白浪の結六
 浪り帯の博多のはま壺一飾し小巾の張るく巻よ
 して希ふてあざらなくメチヨトを拭と持ちあがる

西洋麻正

とき 沙汰よへり来る「旦那お早う
 此方へお入り
 今更に又分署うで
 いひつ候よありま
 あさで上野の
 博覧會
 へぞい
 出て出
 生いざらう旦那
 へ果お出うけよありは
 ち物しらは年の上野の町をい



時分ありてどぞいやはやうるを由
 角由此が望のををさうらも
 後くおけりけるやうでどぞい
 ますねお人
 明治十年の博覧
 去と遠くく百工
 とのよ進歩くはるは採見
 ますよやア美事なるのんざらうヨ
 此よ今日ハ新ありいで洗つて
 扱てつひく異んを今うら本末まで



つて

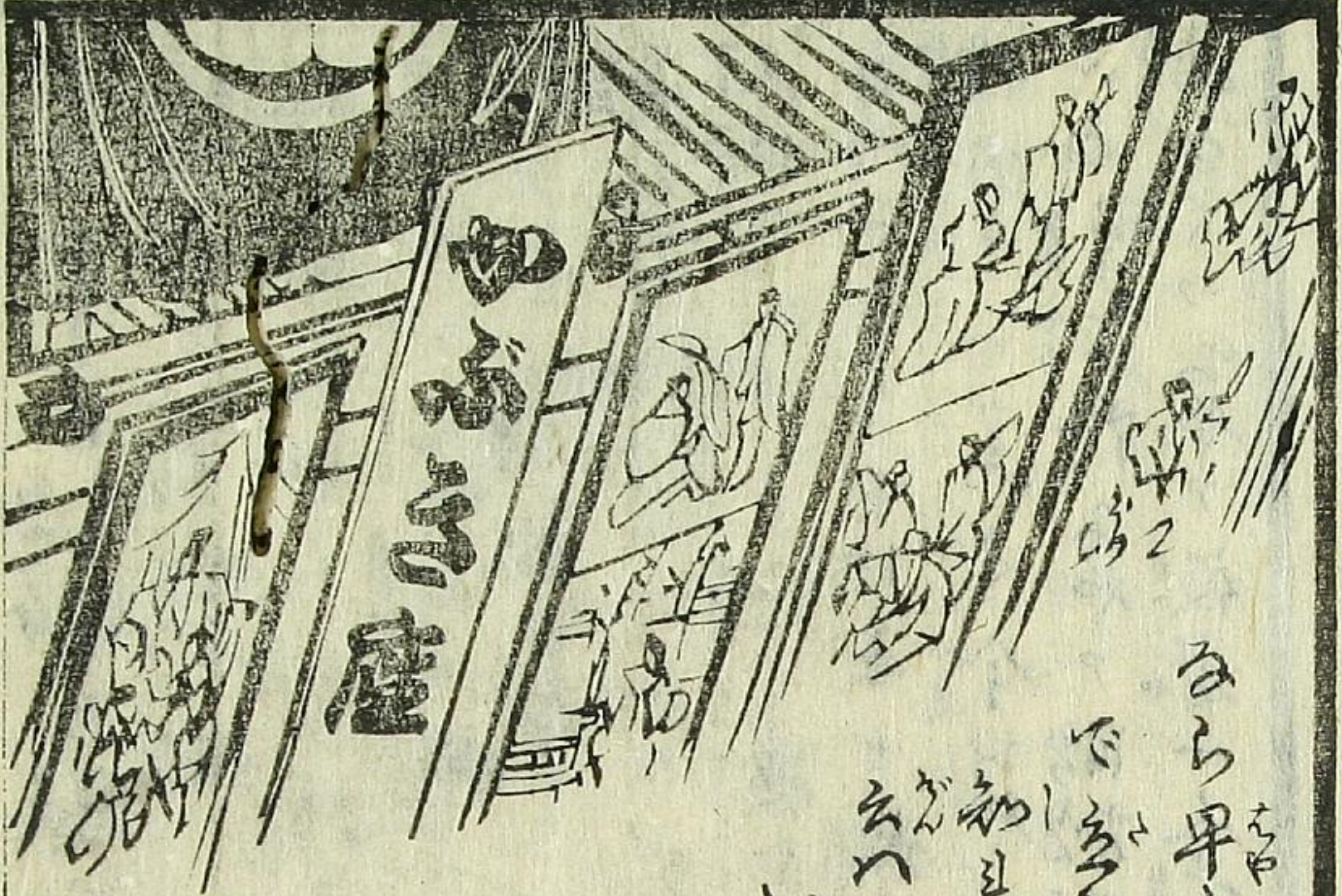
つぎ 借るくちやアあらねども女の子の世活のわけ
 のらん 返る日 條理やなと云つと目みやア分らあ
 ！ 後々云つて居りやア何事も由果一が計うさ
 めうう 高法をなすくちやアあらあんと云ふがな
 んと親うと思ひ付たねんりの資本をたんと節さ
 るくつと判りうの終ひのが有りさうなめんどか
 目取さう 仰いさほご今時の悪者い世の中ぢやア女の
 子を扱ふ高法が第一と云ひまほヨ何しろ自身は
 持まの公債証券が何らのでまうと壁のめやア是又
 後くのめあうまほまの候一判りうの終ひのだけ世活のわけ
 るのめあう方があるませんヨ、一親うと借者と違つと

一 新とあるさうが第一の高法家の借債先ごらうと
 思ふヨざつと立者よあらと目みやア一奥はよ給全
 たり金千五百圓も取ららねん大坂大店の月給より
 う策分終ひり知れやア為終人まう九の人の及ばる
 いるん女と思ひ付るさうの借債社よ止まるサ是
 づつても自分で教養さうとやアま一親ぞおと理裁と
 女の方う居人終よか引き物さうう何まればと云つて
 換のいく気まひの終人のごらう一も二もねん一審の
 高法ごらうとやアねんう「~~~~~」空よさうと云へん上ね
 へ且ね此知よ居らつとやるのハ團洲市川さんの名前で
 文と押さんと云つて佳いのでまほヨ一年中東京でやア

西洋書

五

次へ



むら早夜りの中糸も降通のやぶり
 多きちまのりが自在よ出来るうも
 初とね人が私考みやアそんむ狂
 玄へのけませんヨぶが是れ也由糸
 糸とちがらて田舎よ居りやア
 多きあの里のうらむりとやらで
 勘一ごめい見物よ評判ゆき
 地場の場おとちがらつて一個で衆許
 気張つととを相ながのけ
 糸人と来と居るうも

つ辰



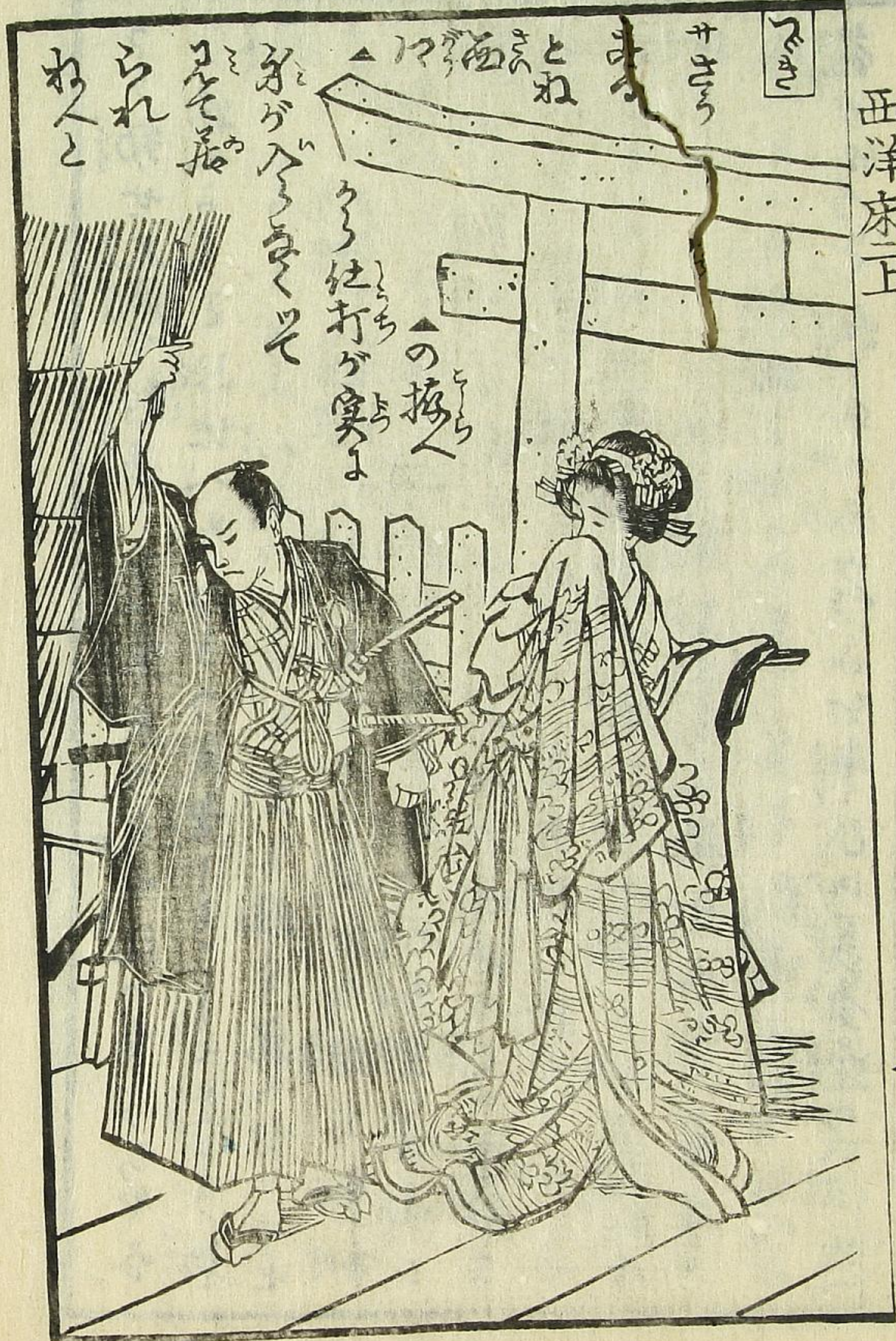
つき居ねで族
 うう族へと叫入
 できるあり金
 なる一女の方
 へうけちやア実
 早急りの雨他
 り位で耳い
 めんでげまヨ

ひやうちやアいざヨ考羽屋の物

天保年間役者
 樂屋入りの所

づき どうせ本筋の腕と出さ一日お還つて往き成
 おくむが何りやま候し去年の秋のうら名古屋張あを
 らくおちやしとら折る大坂の連中とあ合さるる茲
 が一たんんせ知と候は清正なるは預とうけ氷り紙
 冠ツとあ百度をあさるむ由身はまかツと日うら
 兼だち清だちあさめざちで滅法骨とありやしとせら
 大坂とん中も内々盛むしとやうまを之措での判り
 あつとささうはげまが和一の考人あやアせんて大坂を
 往古とちがの今ちやア獲等と勉法一和くやうで
 まぬまに証候あやア日本國中で一室のらちと新富町彦成
 清なくツちやア役者一人兼とちをれ和人としてあるのど

うら勉せ大坂で勉法一も東系のあを洗ひきつちや
 ら和へうらと此地へまわりの後樂一とよと生うら勉
 法一やうとあ人知でうらも兼と深と和くやうでま
 口む由大坂の突川迄あとうらと此地の親方彦十郎
 と兼あまうらと評判とあやま程の大立者あやうら
 親方の足元へもあまあのとあうらと被地の人の怒候ま
 ちだらうがまア清さんか関さまの秋を一とあ
 進者さんが名古屋で西南争勅のあれた都一相を西郷の
 及ぶと一見物とあうけまうらと幸ひは具負連のあ候
 和くと一日見物とあうけまうらと幸ひは具負連のあ候
 和くと一日見物とあうけまうらと幸ひは具負連のあ候

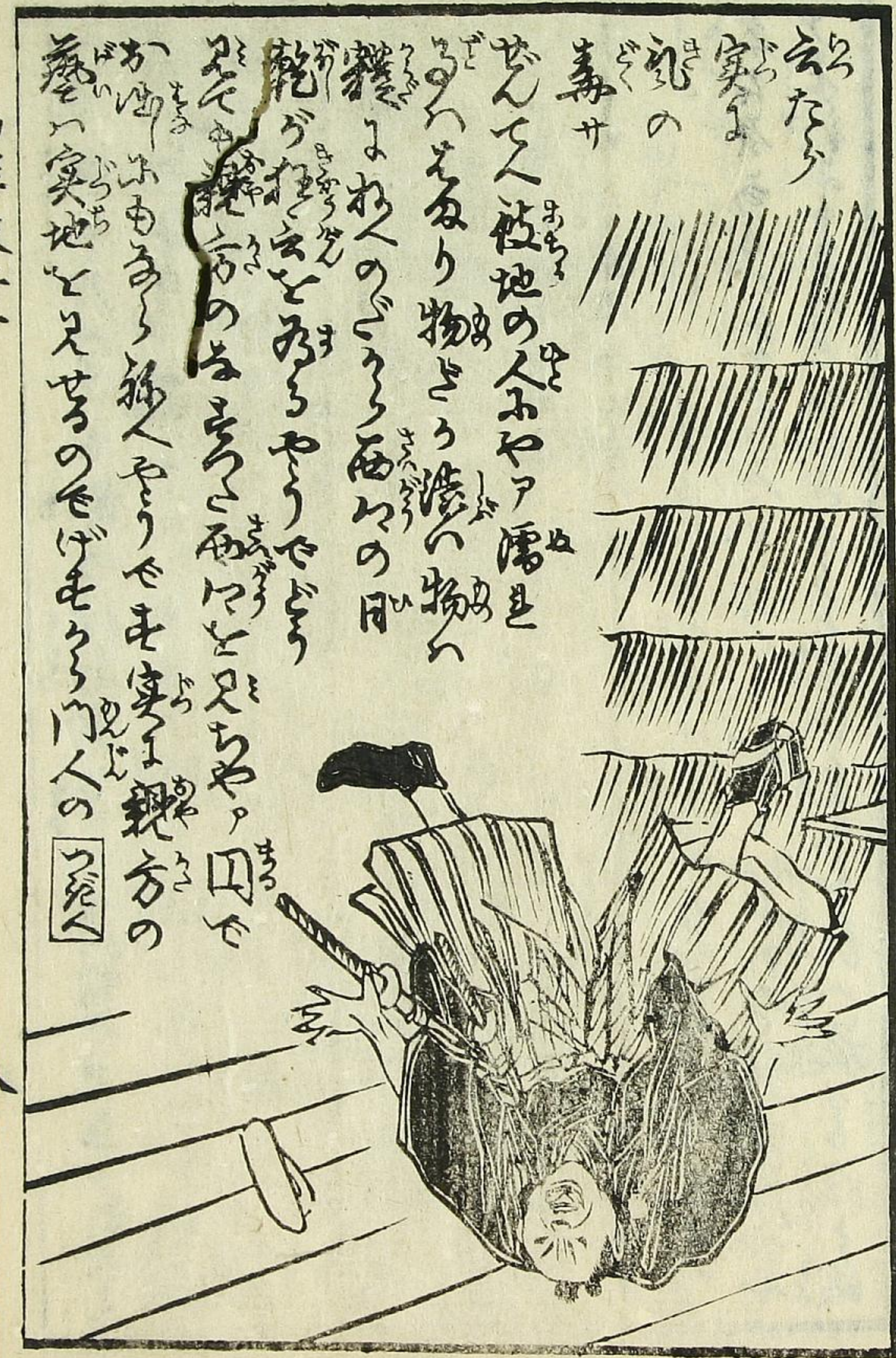


ついで
サキ
とね
ま
は
な
れ
わ
と

の
か
ら
く
は
打
が
実
よ

み
が
入
る
ま
き
と

み
そ
花



公
た
ろ
実
の
毒
サ
ん
て
人
被
地
の
人
ふ
や
ア
濡
是
る
い
を
な
り
物
と
り
邊
の
物
の
糞
よ
わ
ん
の
ご
う
う
西
の
日
乾
ぐ
な
を
お
ろ
や
う
や
ど
う
見
え
る
後
方
の
な
ま
さ
ら
と
西
を
見
ち
や
ア
田
を
か
ゆ
ふ
も
あ
る
鉢
人
や
う
を
ま
は
ま
は
親
方
の
意
地
と
見
せ
る
の
せ
げ
を
う
う
門
人
の
つ
た
人

思ひおきまき一実よさうざう候一親方あんぞも大坂
 吸者之立命の目あやア何れも敷合由職田屋の門人ど
 うり者一と扱ひぶらぐ田舎吸者とい違ふざらうまじし
 て親方の名古屋ぢやア何れを頼りとのだん親方頼い知人を
 っさうしうねん一ナニ向ふテ親方親いのをまう下役
 一う付けね人のをま一その頼り親方親いの知らうらう
 何れ一相中の脚を親方親いづくの指さるるを
 一「皆まんそんあふ笑ふゆんぢやアあませんヨ
 名古屋あうべとそ親方親いと多くとせうかまのの親方屋ぢや
 アま吸ふもせつとあひざうとあひまそを親方親い頼りう親方親
 一「皆まんそんあふ笑ふゆんぢやアあませんヨ
 名古屋あうべとそ親方親いと多くとせうかまのの親方屋ぢや
 アま吸ふもせつとあひざうとあひまそを親方親い頼りう親方親

り歩形と大体の知あうは由別番扱の立役者で
 絵金由相親一知まき一異吸者から年一以里気遣
 一「名いよやらう一親の尾より由親の指を之指オット違ツと
 楽屋ぢやア大層な親と一「名いよやらう一親の尾より由親の指を之指オット違ツと
 此地と扱とあやうよう田舎歩形と扱このをまぐ
 借分歩形うちあやア面白の世一「名いよやらう一親の尾より由親の指を之指オット違ツと
 関る人此ゆる名古屋と仕立とさうと少し豊指とせや
 ツて東まきと下度豊指とさうに里まをうり隔ツとネヨイ
 と人由り序田舎で一月をうり奥形とあうらう
 此形とせられると云ひまはの一月の女月まはり
 田舎は控て見まはと評判よりう程いとさうで人由一次へ

日本軒よりまきー山家よりまき
 てもあつたまきまき既うだうやうつけ
 やうとせ活方ふも若込



ませて家
 巻の掛り
 全外まき
 十分はな文一
 やーねまといふ
 近年のほ存トの通り田舎の何うふ
 往ののんざうう岡崎や豊橋は負あつた積り心憤發
 とやううーまきまき面白いわアありませんう

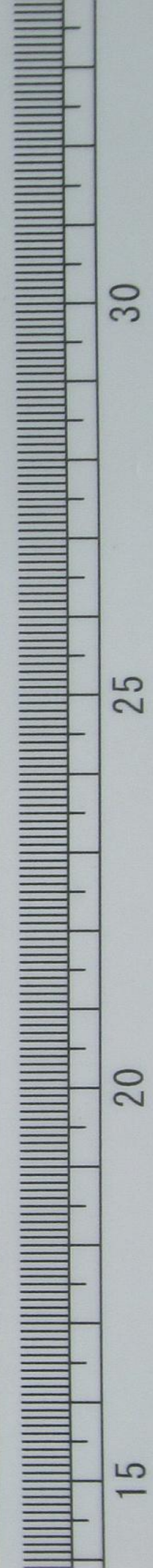
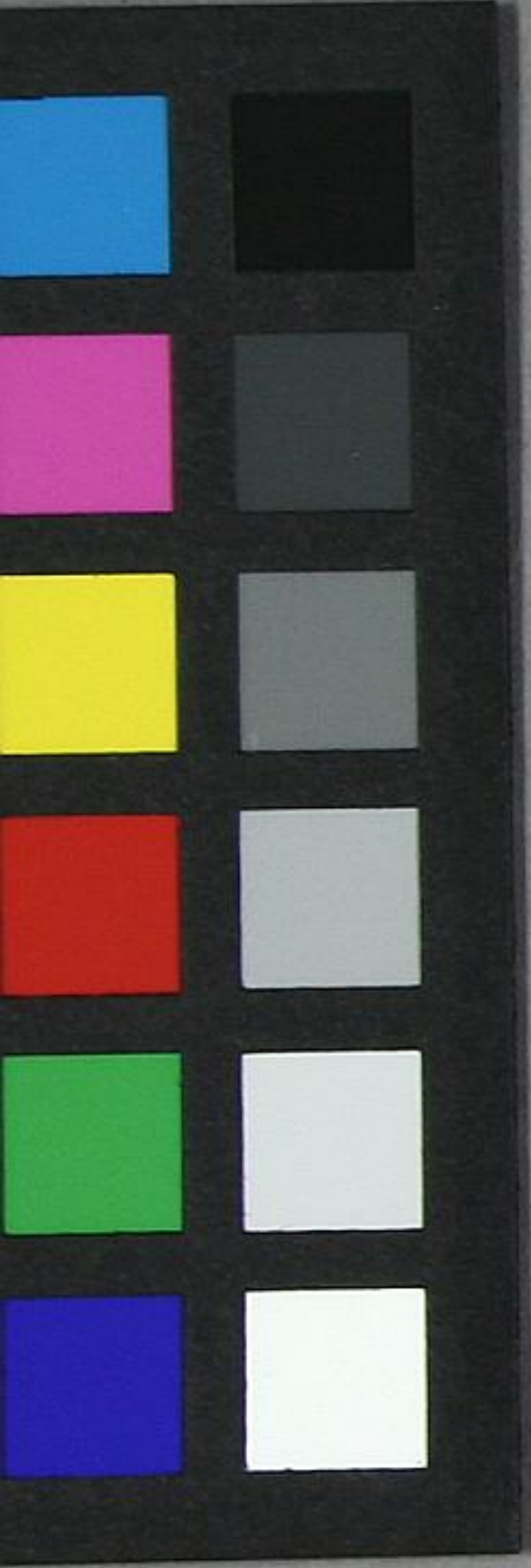
中の巻へ

<p>近世紀聞 <small>和篇</small> <small>以下要覽</small></p>	<p>高橋傳説双譚 <small>大八尾編</small></p>	<p>水錦隅田曙 <small>大三尾編</small></p>	<p>格請入傳説賣 <small>大三尾編</small></p>
<p>綾重改叙春秋 <small>大二尾編</small></p>	<p>夜嵐阿鬼奴花伝 <small>大五尾編</small></p>	<p>金花七變化 <small>大十尾編</small></p>	<p>鶯夜女鳴神 <small>大十尾編</small></p>

金池本問扉
 錦繪

金松堂出版人辻岡丈助
 早稲田橋山崎下町三番地





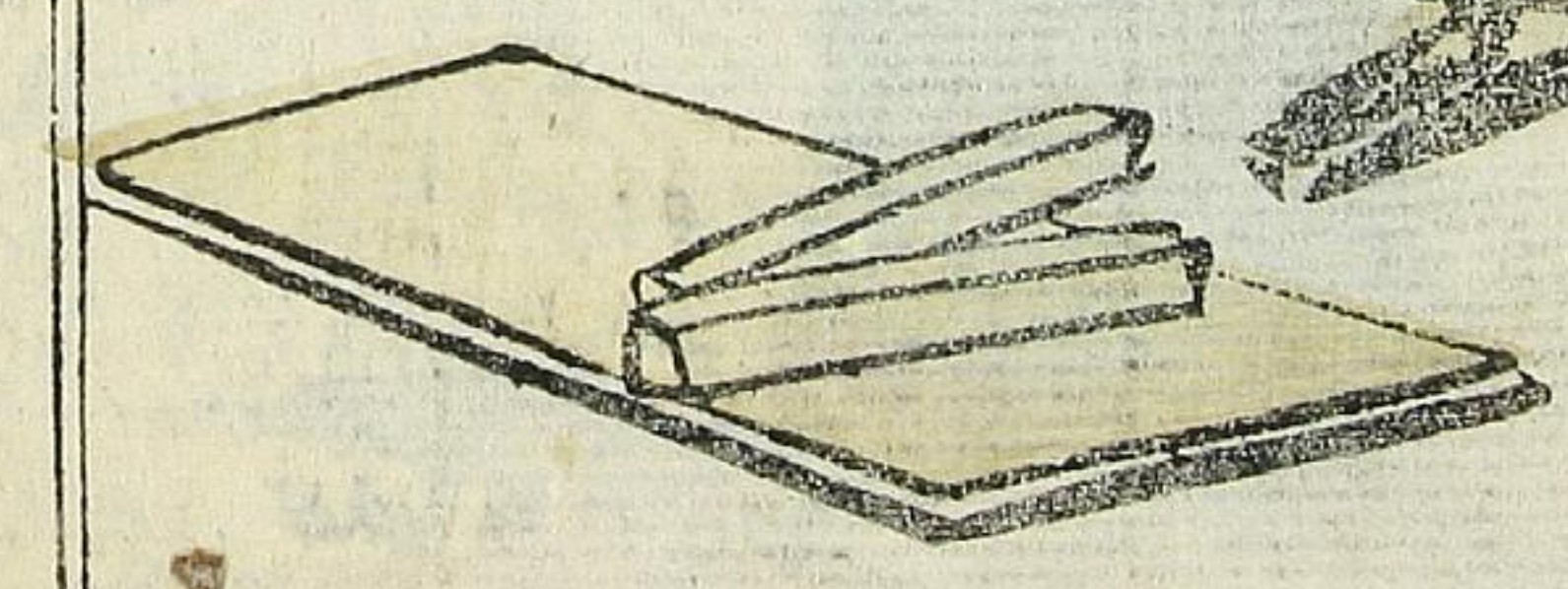
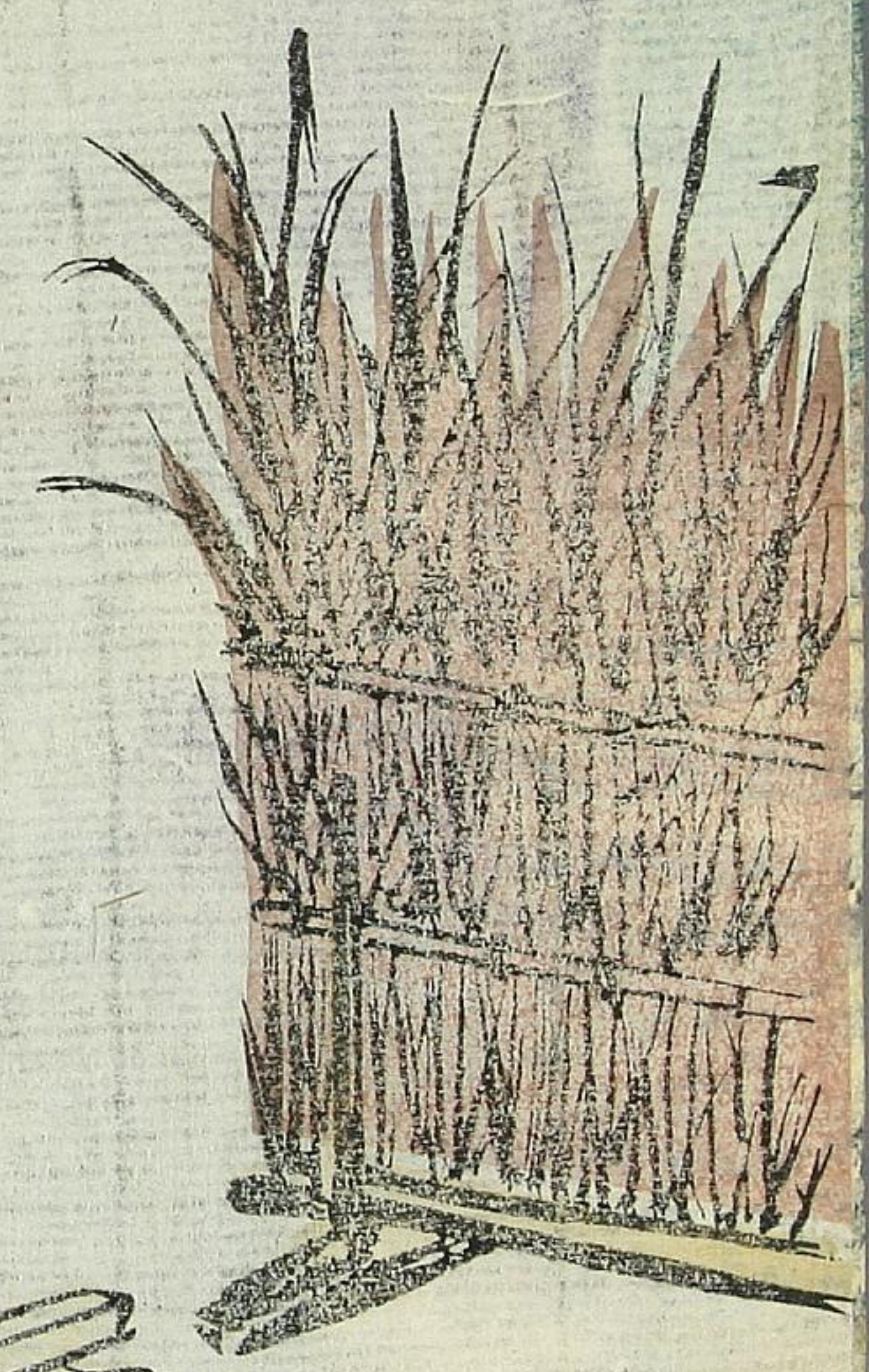
A526
5

西^{さい}洋^{やう} 東^{とう} 編^{へん} 中^{ちゆう} 之^の 卷^{くわん}


櫻雨園著

松斎画

金松堂版



<48-8394>



當河のりき書行伝

當河世治人仲

上巻分 更々松どのの一组が有り込と云人評
 判が定へると無の考村方の多の云もなく二
 里の里の近村を是れが此のそあるのと云
 中うおぢやア此の處で蹟の寺ありと云
 中うおぢやア此の處で蹟の寺ありと云
 不思議と云入るるある人云云云云云

つぎ 今や 眞如とあるは人よやつと 相伝の 漁文が 物
 り世 人々 相伝よまらりや ね 一書目が
 後山で二をん 即ち 千本 権忠佐の 乃ゆとさきり
 相伝とわけらるるの 松一の
 かんがへやア 後山や
 千本 権の 松生人の
 権忠佐 乃ゆとさきり
 一書 見せせとらごと
 私 漁文とあや
 一書 見せせとらごと

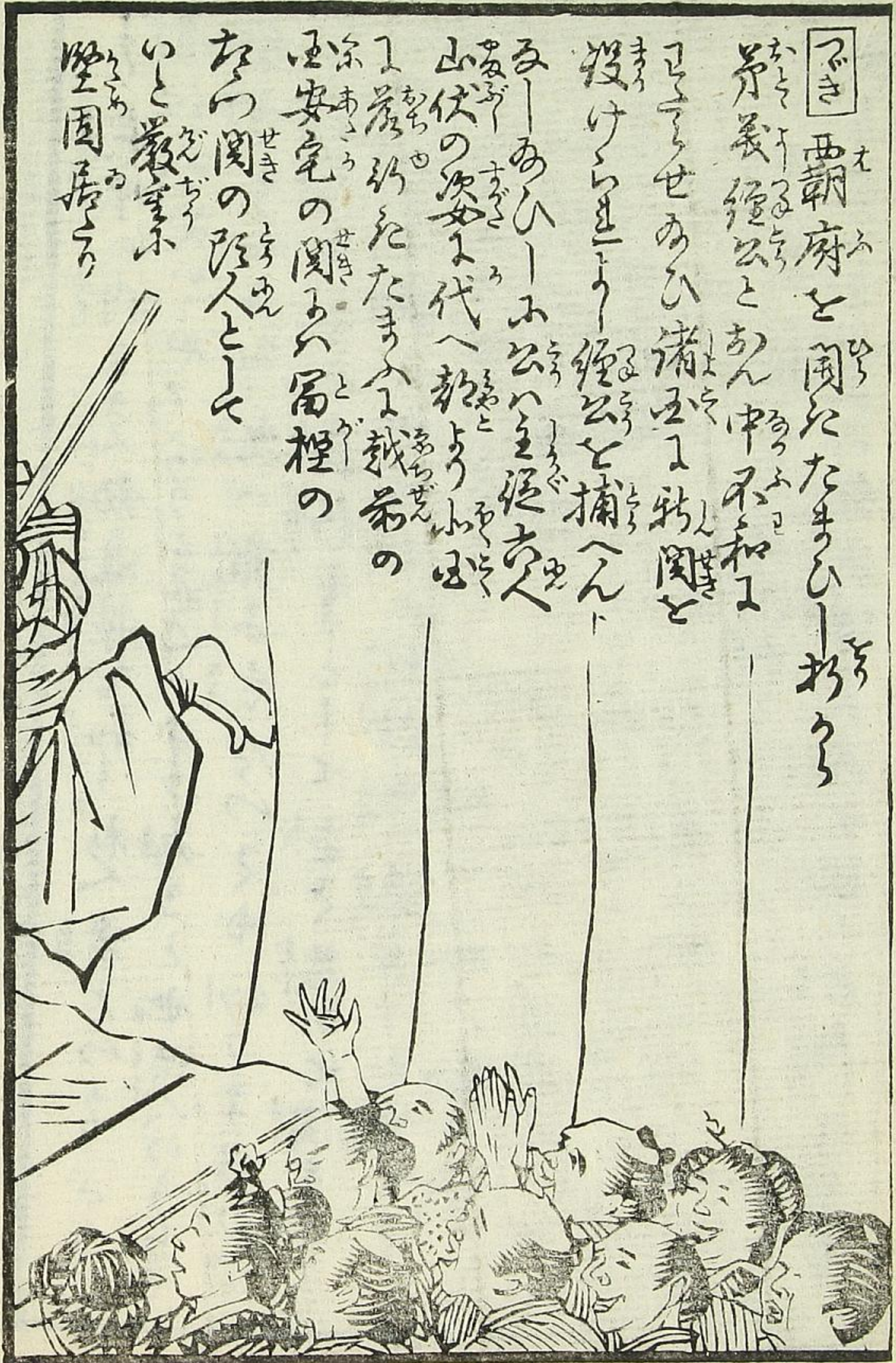


さなへ 何ゆか 岫べげまが
 只今の 権忠とあや 別上 権忠と
 からごと 今が 今が
 下の 権一の ござり 同ド
 ありあや 余り 仕ねへ
 中りる 面白い
 仕組と
 らざりて
 志やう 余れ
 外の本 地とちがつて 比高 村ハ 藝々 乃ゆと
 つたへ

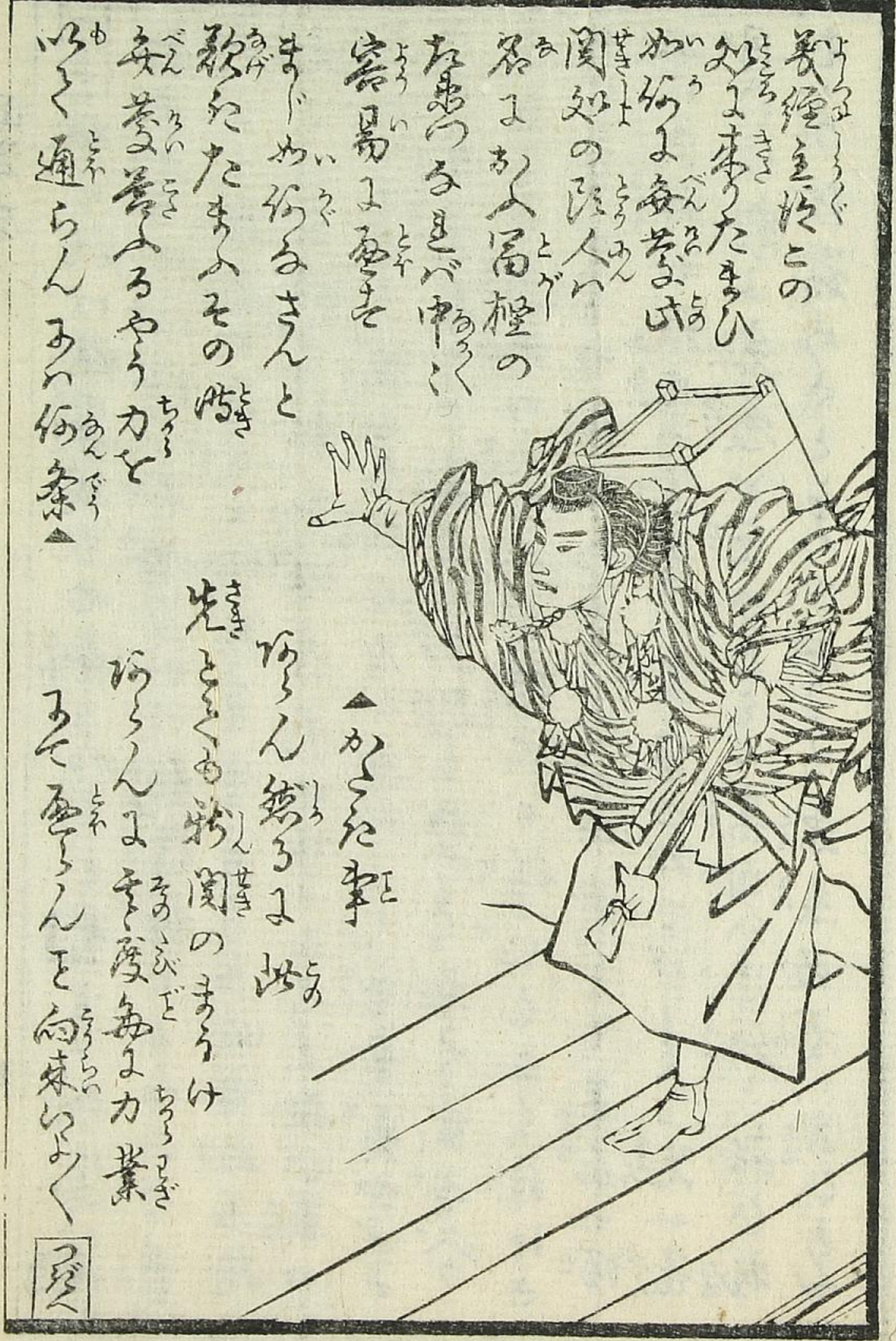


つきさのちやア皆さるが明るいのごりうるるるくハ二巻ん
 目ごけありと考ぐ座一ちやアめ外を考うとお流と
 掛まはとねまよアさうだん座人外村とちづつそ
 氏神さるの祭礼でもりも踊り出ーさうお踊まひ
 ね人のが当村の自慢ちうめんどううまよアおま
 だこの注文でせつと異んなまのとお出ーやーと
 のを注文と付やーとね一書目の注文のまといと
 二書目の款舞妓十八番のうち勅進帳と一しう勅進
 ありう是ハ陣通市川團十郎の座傳心外の家筋
 ぢやアどんあまあつても出来移人のごりう是れおま
 へのごとあつと知ガ実入おまやーとね世活人のり

見せし連中の内よまき勅進帳と知れ人者をつりごりう
 随分可笑いよアありませんうさうあつと世活人のうちで
 總方そんる出物ハ難ふ方だつても知りまはれん
 らその内よまき自りまるとしてまき始めに聞まーと
 その勅進帳とやらまき新注文の筋をりも吐ーと
 聞せるまきとまきひやまらう私ガ思ふよア茲ガ筋よ
 りよまきあし聖の場場とと隨分法螺と吹き出ーや
 とね柳ハ勅進帳とのつを市川家の祖先柳進總方
 が十八番の新注文と工風な一書一勅進帳と御を續
 ひと助六矢の根よ市川團十郎一柳進と一十八番と
 御をさうしが今ハ勅進帳と一徳吉源の新注文一御を續



西朝府と関たたまひ一おろ
 弟長経公とあんな中不和一
 日さうせあひ諸公と新関と
 殺けらまじよう経公と捕へん
 互一あひ一ふ公い至は交
 山伏の次女一代へ教より山は
 一落したたまふ一裁者の
 玉安宅の関より留檻の
 なる関の匠人とよ
 いと教室小
 堅固居より



長経主は此の
 如く来りたまひ
 如くよ長経は
 関の匠人の
 名よあ人留檻の
 なるのまじの中
 容易よるま
 まど如くあさんと
 教たたまふその時
 長経あまふるやう力と
 しく通らんま何案

先とも新関のまうけ
 何らんよそ度毎よ力業
 まで長経ん王向來いよく

壁多れば篠畧成りてゑるべしと見より
 於東大寺の役倍と名ありかの勅進帳とりみあげ首
 尾よく安宅の精閑と載えたるありあき紙歌書及工術
 通しや名則ち勅を懐といやまありなんと然ひ筋の
 極までしやう感ゆる程だん屋心と大房養美やしと
 ツケ彼是と其日の又別よありと来と樂屋今
 とあると見物い山の如く控大と持れもななく付けと
 のごりらまゝで白中のやうでげまのつとも芝居の場
 所の氏神の社内でな慶い舞臺つたでげしと一書
 目の役割は若殿と文けと二書目の忠伝と然ひ物
 をうり故勸めこととらでどうも東京及者ハ其ひのん

ぶ糸川室の御座さんへ然ひさんぞと織うふ坪たんが
 豆つと実又田舎の妙でげま宿屋の女中又和と込んで
 来る付け文章の教百本のやちや困りましとヨ宿
 の女中の云ひまははあアおんを付け文章ハ沃山
 来との見生までのお役者さんうのいるをまどうせ
 暗く返るの出来まはまいうら此中では今もあるのと
 女の然ひのたりよ何と一茶でも返る紙おげて
 下さいおまてあいと私が申瀬へたらしおひかよ込
 りまはと通らざるので後しとるよ返るとるやう
 うらその中で派口の然ひの紙捲りおしとるよ
 とね女中が腕まくりで捲り出しとのが六百本つた

つまじりもあらうまうとヨその返すと
 のちく書と目やア歳日
 かさるうも知まおへう
 のろそ活版あでもあ
 やううと工風と瀬
 とこころんがか水知
 のるり田舎のるど
 うう活板をへる
 実よと南窓サさうまる
 と女中が小首と傾むけて考
 ぐまうとつけ親方さんぞうせ



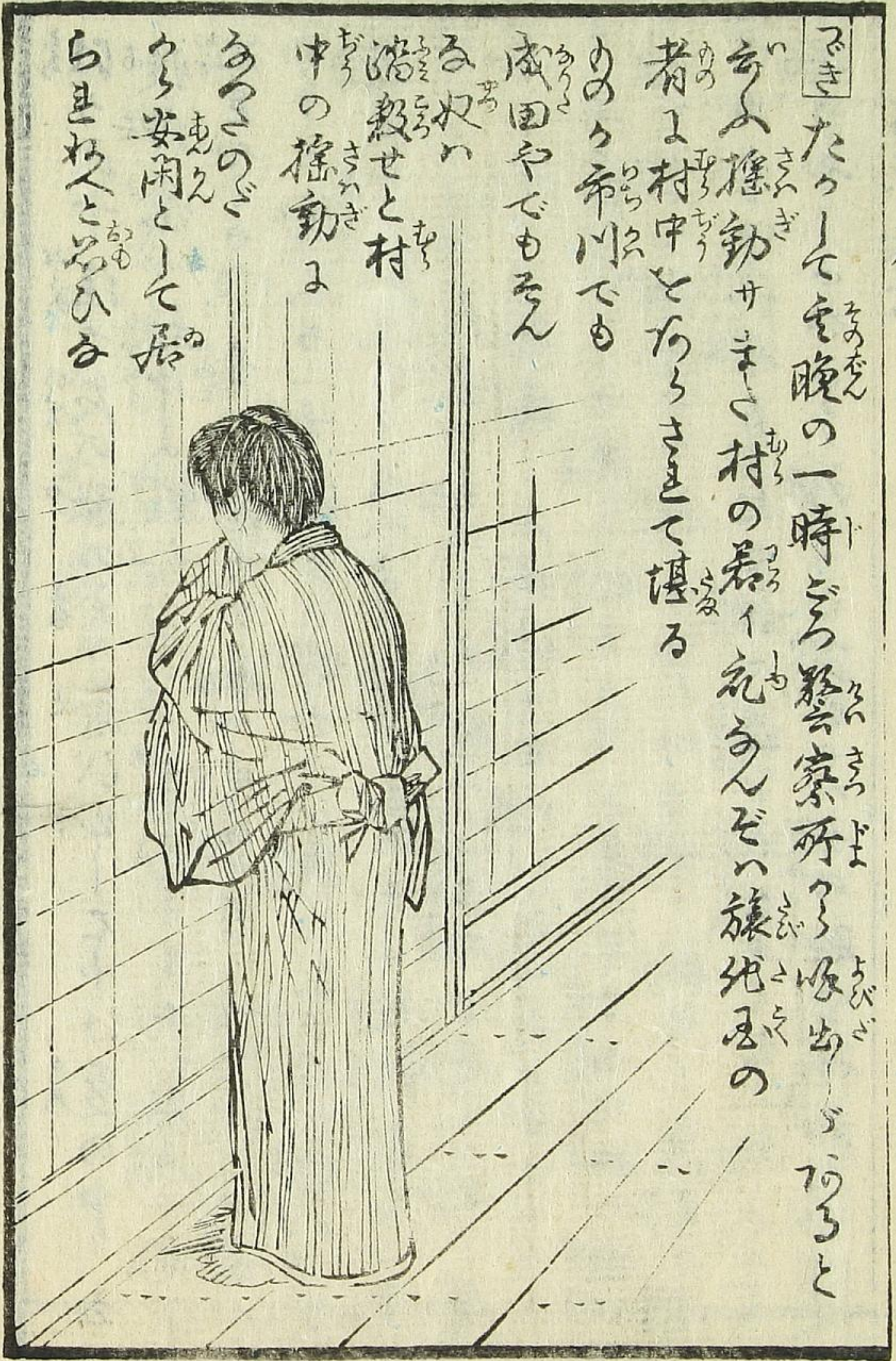
何よりまへ又返してと日あ
 大愛でまうう遠ふはま
 あやうば中でお金の
 ドツサリおきまの
 細村の後家さるで
 かさねさんとあみでまう
 牛方へキョイト一茶返と
 まさのなまとも女の終ひの
 か好とあう穉人の娘でかま
 さん至齋屋のか屋さんでま
 どりみさへまはとりの女が終ひよ



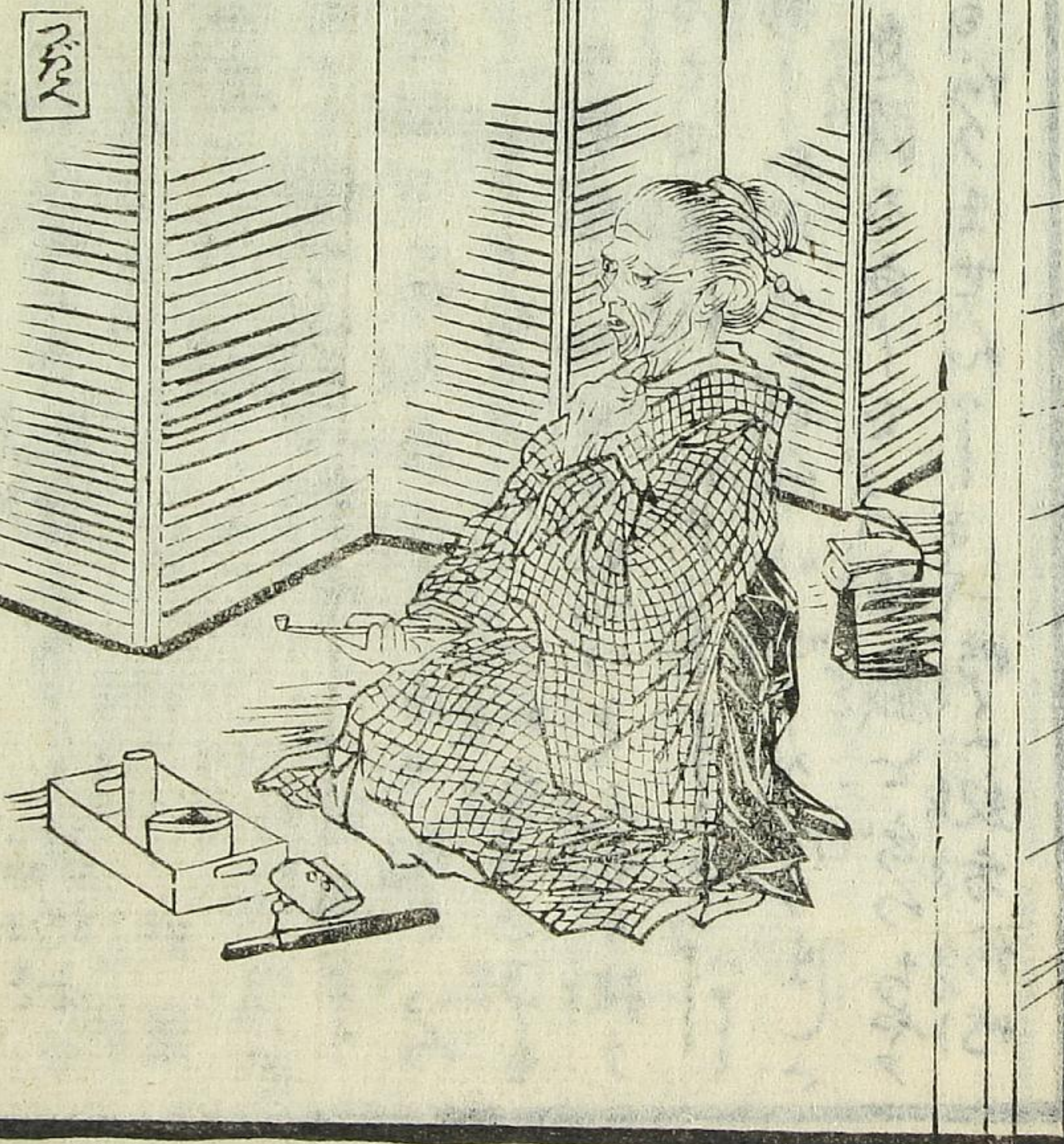
つき回舎者で去るうりあるゆへにも高法と態の禁書工
 出るゆへに後家さんよあやう候し金だけへ走人移入
 かまさんさんの働たてあうまくつちわア御ふくあひら
 その色へ参みあんで居く下さいかれはあうらうと
 スット出し紙極めとんで翌晩も芝居ばかり十三時
 まだよ高よかつかうと女中が親方を方があう
 来て入らつあやううう契の離は産後へアアか土産で
 まよと小札まど里で又田をうり由紙又うらんで呉れま
 しょううヤレ様しやと内懐へ押えんで離れ産後の標側
 うう障子紙は内女のやうまを個うと備ハヤ驚る
 うあひらうう勝まとおつ潰しやうヨ其女と去るハ事の

以が六十位でたの服のまが飛び出しをドけ登のやうな
 瘦神瘡が顔中よ敷礼して二夕月と居るまの敷色で実よ
 おまやうとらう幸ハ二階の客の産後とをうけよその晩ハ
 ぶうの運ふう一寸遁まよ逃出し物の二日月の晩に連由
 逃る分みわアいっやさうだと云つと一端納文しと金
 と久まよ疎害のありとを喚ハト工風と葉ト出し芝
 居の果うう夜通しふ岡崎まを逃かまよあうまよとスツク
 リ用意をいして脱は逃かまうとまるとま女が私の病口
 上を定て急つこの潰らあひのと必しあうあうあう
 で月宮の清振あうたで私の跡と題目まとあう物ごう
 困りやうとねさうあうとまなま女の腰を押若らう

きた たつてを晩の一時ごろ警察所へ出でたると
 へい 捜査サマシ村の若い乳あんどの旅死玉の
 者へ村中とたうさまで堪る
 のり市川でも
 成田やでもそん
 むねの
 潜殺せと村
 中の揺動よ
 あつこのど
 う安閑として居
 らまねとるひな



せききうあつて
 日あやア又田や
 十田の金主代
 へらまねく世
 晩の内よ
 二人引の人カ車と
 一切入費うまひ
 むしで墨倚まで逃
 出ーやーごが
 定まららうのせ



べき 意敵と云ふやりの泣て送る勅擧あるう 積死玉で
 怒るるんぞい懐いむでーでゲスヨラ 此れより新編
 座の俳優政治家橋が入り来りーくバかの堂みゆの
 悪さうる軽つたるそ オヤ親方はるハ暫時く 様様より
 オ、固み尋さん何所解つこの大納田舎もア其くいつ
 さらう 随分あつーい吐ーがなるぶらう 一何愛つさるも
 ありませんり 近年の豊作で田舎がかんつくる人が然う
 ぶかいまきくら 方とで真物よりつまきまーとハア
 一親方さんより 勤一か早と面白吐ーが何りほしと
 ツテ固み弟さんの急請をみーで 一津戯と云つちやア
 のりね 面白くもなれませんー あう 何れも親方何れ

ぶらう 一「オ」と泣や何牛と名移 二十時おア二十分
 お早うぶらうのまき 一さうう 是ぢやアまじ 他と賣ても大丈夫
 ぶア、賣まよ けり切ろヨ 一旦那あふとそんまよ 何れまん
 むさうのでま 一内の妓子の一件サあつと賣はが立
 と商人のもの何と親達自分懇むり出さるやレ情と金
 いかんまう 那妓と云せのヤレ 松達もある年よあつと
 うう 那妓と肉へーして 舞臺子と貴川と 原居があれん
 のと種とのみをかつき出して 面例で困り みるヨ 今ぢや
 ア抱へむらり 三人もあつとさう 隠分やうまういのサ
 やつとは妻一本で賣出さる 急助あんどハ親方由知つ
 てわるさるるう 七ツの坊さう 引さつさう 矢窓とつ った

一 杯の癩病で夏冬をくまるといふ
 まにわく子枝がうらと今居る奥アウ丹精
 一 ヤツと今日が目まで容れと
 近くやつて粒が古いか痛
 うう下方の味線い長
 教よ浄呂離の
 清元と名はる所
 通とつとつはは
 のと自分一個で出来
 やうな顔とあやアつとヤレ
 此肉のえき物が紙くまのうらか産容で



下の英へ

近世紀聞 初編ヨリ 伊東重三編 三尾編
 續重夜紋廻春秋 伊東重三編 三尾編

高橋阿傳夜双譚 八尾編 夜嵐阿鬼花伝書 大五尾編

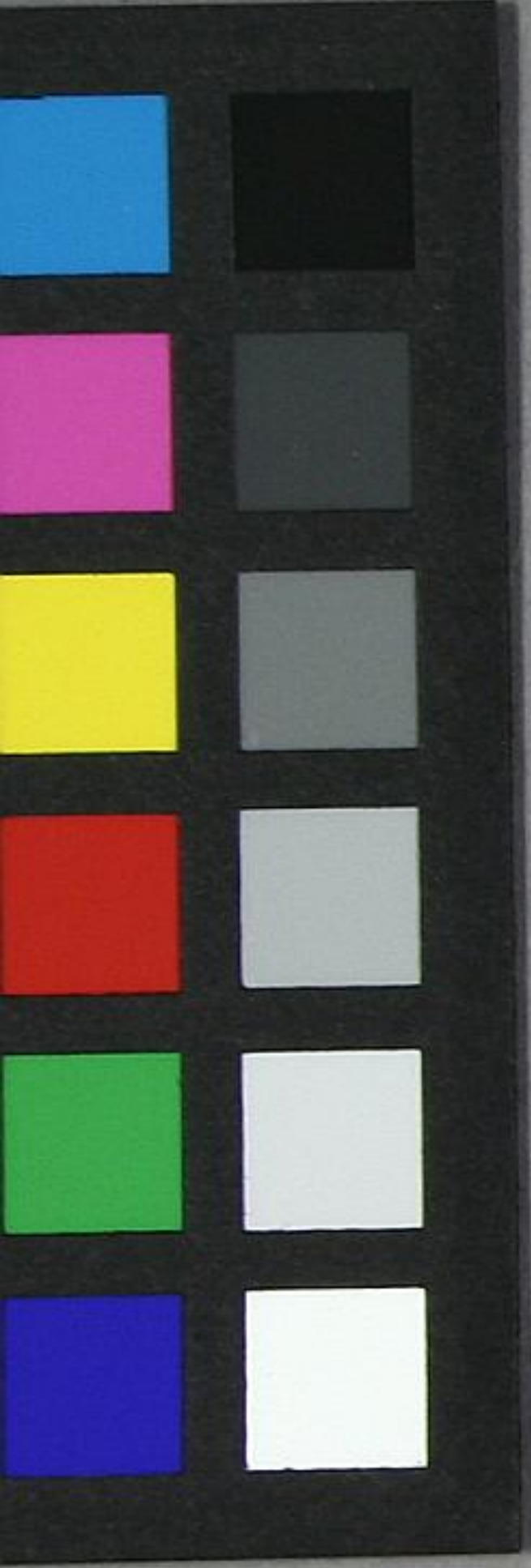
水錦隅田曙 三尾編 金花七變化 次編 辰

格蘭氏傳休文賞 大尾編 濡衣女鳴神 大十尾編

全 地本問屋 錦繪

金松堂出版人 辻岡丈助

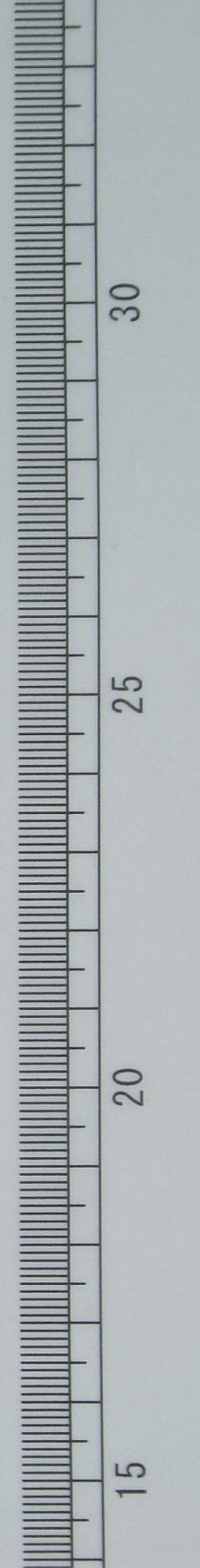




松齋吟光画

金松堂梓

下



A526
6c

西洋家

櫻雨園

著

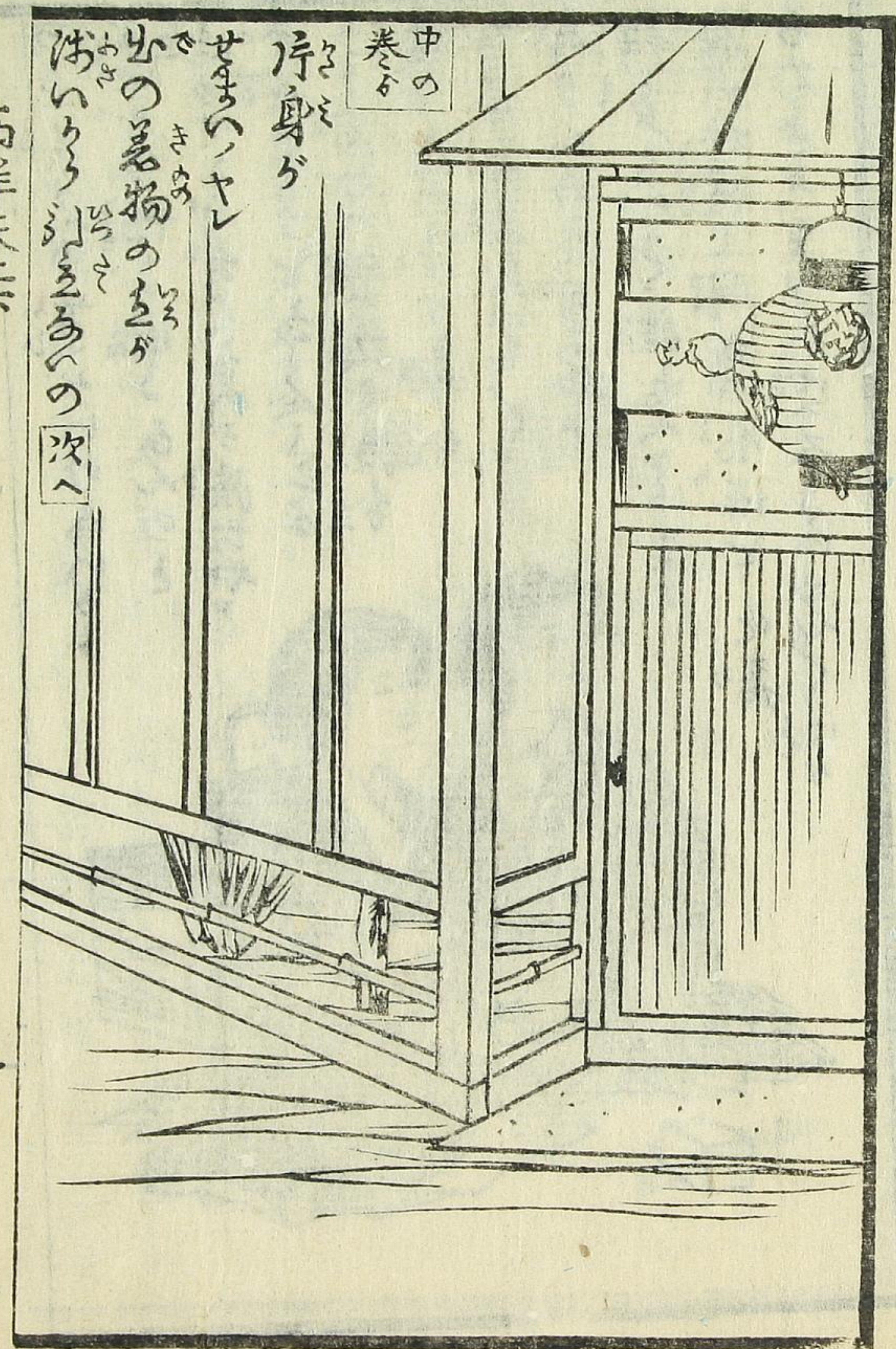
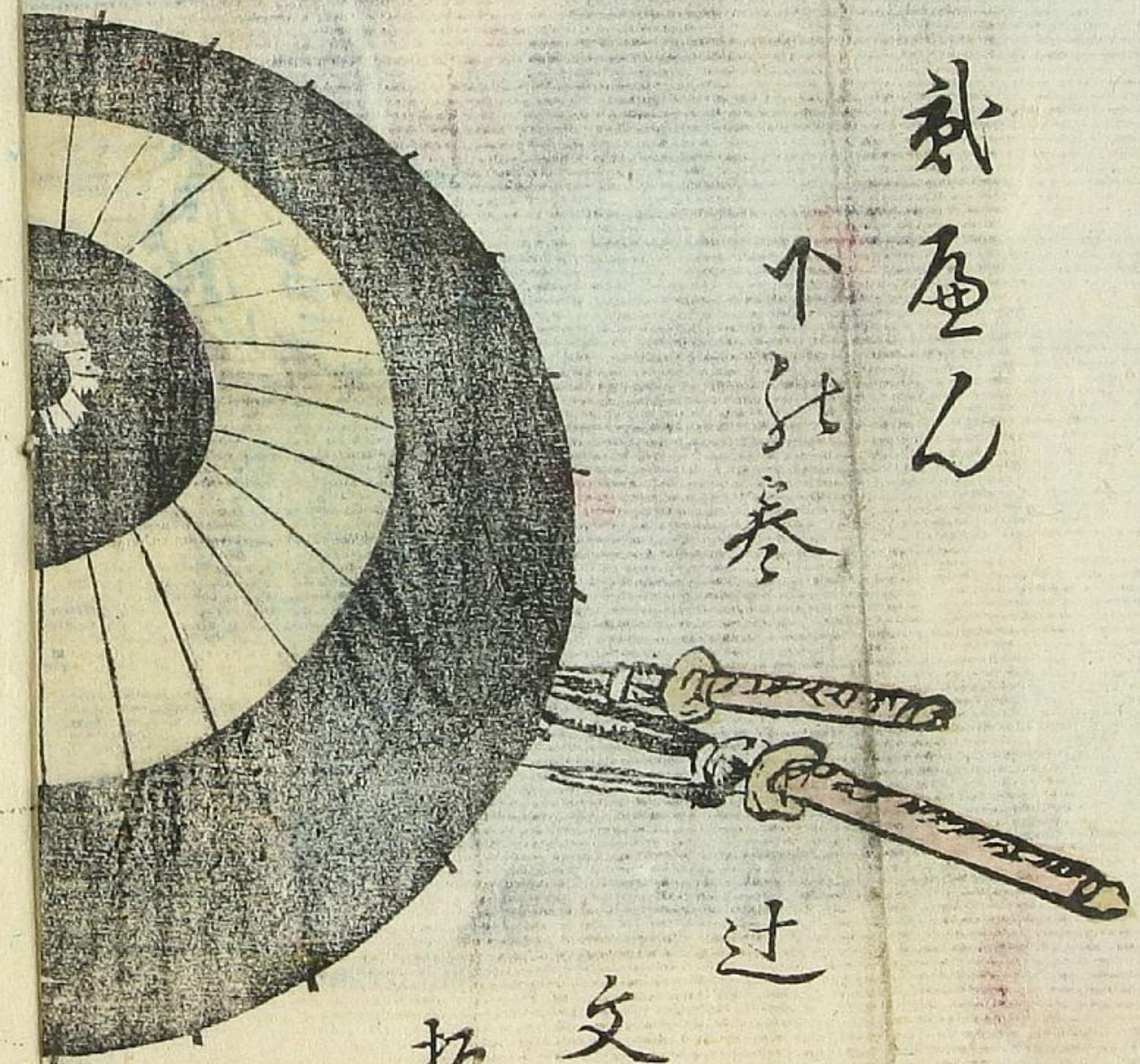
松斎画

秋屋

个能卷

过

板文



中の
巻

片身

せまのヤレ

出の着物の

海いりり

次へ

西洋床二下

<48-8395>

つぎ 蒸ぐの茅がけあいの
 遠出の舟は團るゝんと
 白くそとそとあつたが張ぢやア
 小まをうるとあつた
 うり団げの皮後で湯分
 腹のたつたが年分
 ちるがねまといちく
 ちりちげた目あやア
 辨多うのさむねわくうまア
 細い加減は団あゝ風俗とて居
 るんががまアお受るさのぞんくにはが



う つくえんるが毎日か産後が懐つら
 大後まりんが此内の
 法汁の己が腕で
 ちやくやうのぞと
 いあゝむりの
 形つきとあやア
 つか服より物や汁
 ぢやア喰うれあゝつ金うまみやくでも
 お菓とあゝ細ひける肉ぢやアあゝえん
 肉よ長居とあやうより早く自らよあつた縁い
 備けの一個であゝこの鬼くア自烈てんきんと
 つ後



つき 生息の風俗とあやがる一まる二日由二日由と
 人ぐ之入か業と挽とと来るとまをさるゝあね知
 も早くうら死び記きてきた掃除とあやう雑巾が
 けとやうたりたり様と物の洗濯う布巻と干う
 仕舞うう蒸くしーのを働らさやまぐ個の一本でも
 けが掛るとまううとままーとんで私さあいつの
 肉のおとどんよ来このぢやアあうう掃たり中うへ
 出来あへよそんなむをううーと目あやアあゆ足も
 だいなーよあまては舞てか産後へもあうまあやうよ
 あるよあんとよ此の内へ人をひがけうくってか女房さん
 が目うが利あへうう実よおまるよあんどとお辨舌と

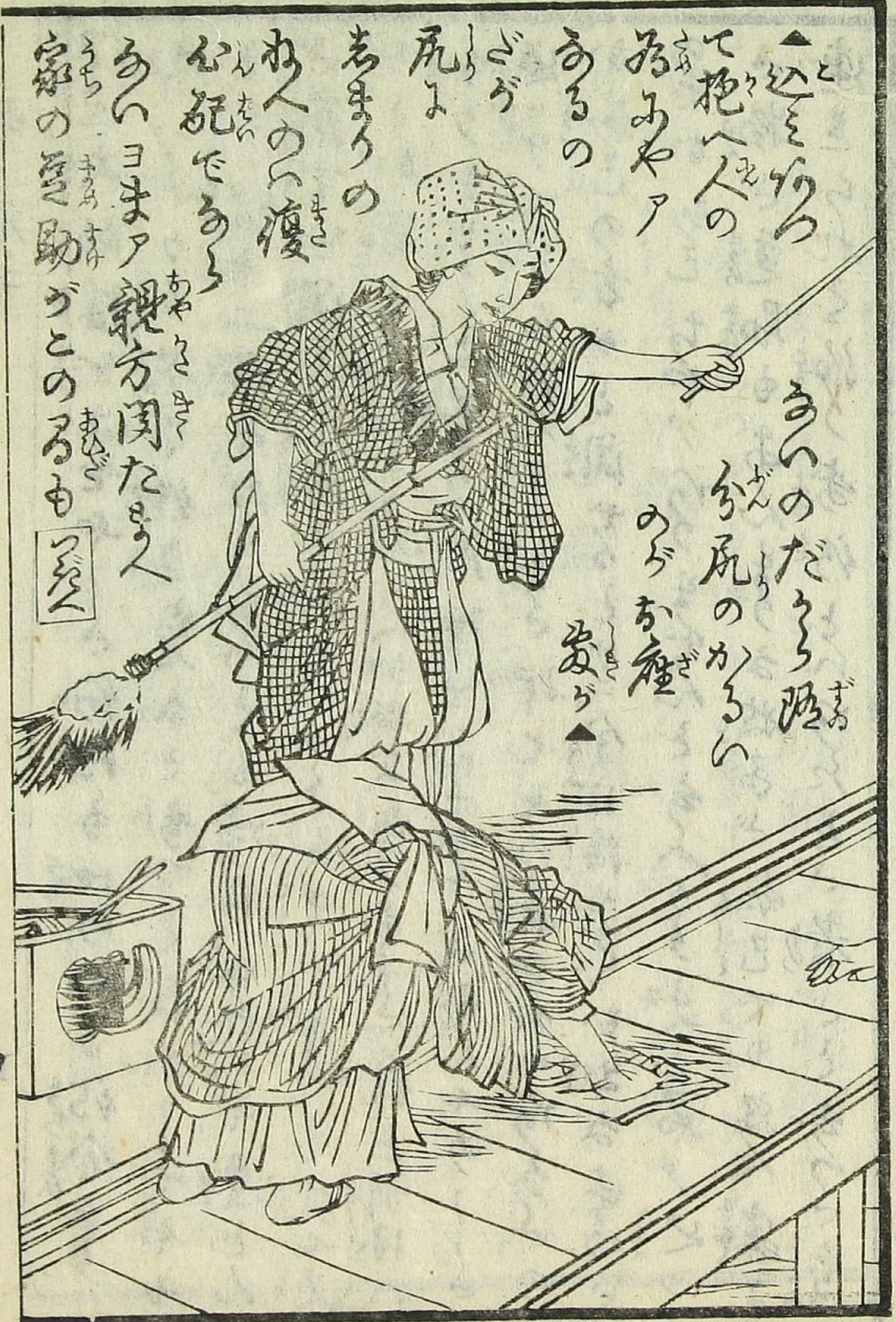
本どめる一務をなむをうを疎んやまヨまねど
 せ浮気家業どうう流分保とと教で色客の一人や二人の
 ありあ人のみだがまううと務をよまはちやア此方の
 高法よあうあうう自分達か好む男で金のありやう
 なる客人もあう色も無もあうが紙ひがを勝よあつたう
 一息已等の身へ通し狭くと負て殺ましくあつて壺の
 外ぢやアお女と男と物と博び合ひへ疾食の望まうが
 出来ぬ物でもあうううも勝よあつてにが利とあへと
 金候よあうあへのううまんでもお女馬鹿な目よあ
 事かあうううとあつて聞かせ知がその勝をうり
 で初の客で家も名義も保くありもあぬ客よ

田洋成三

三



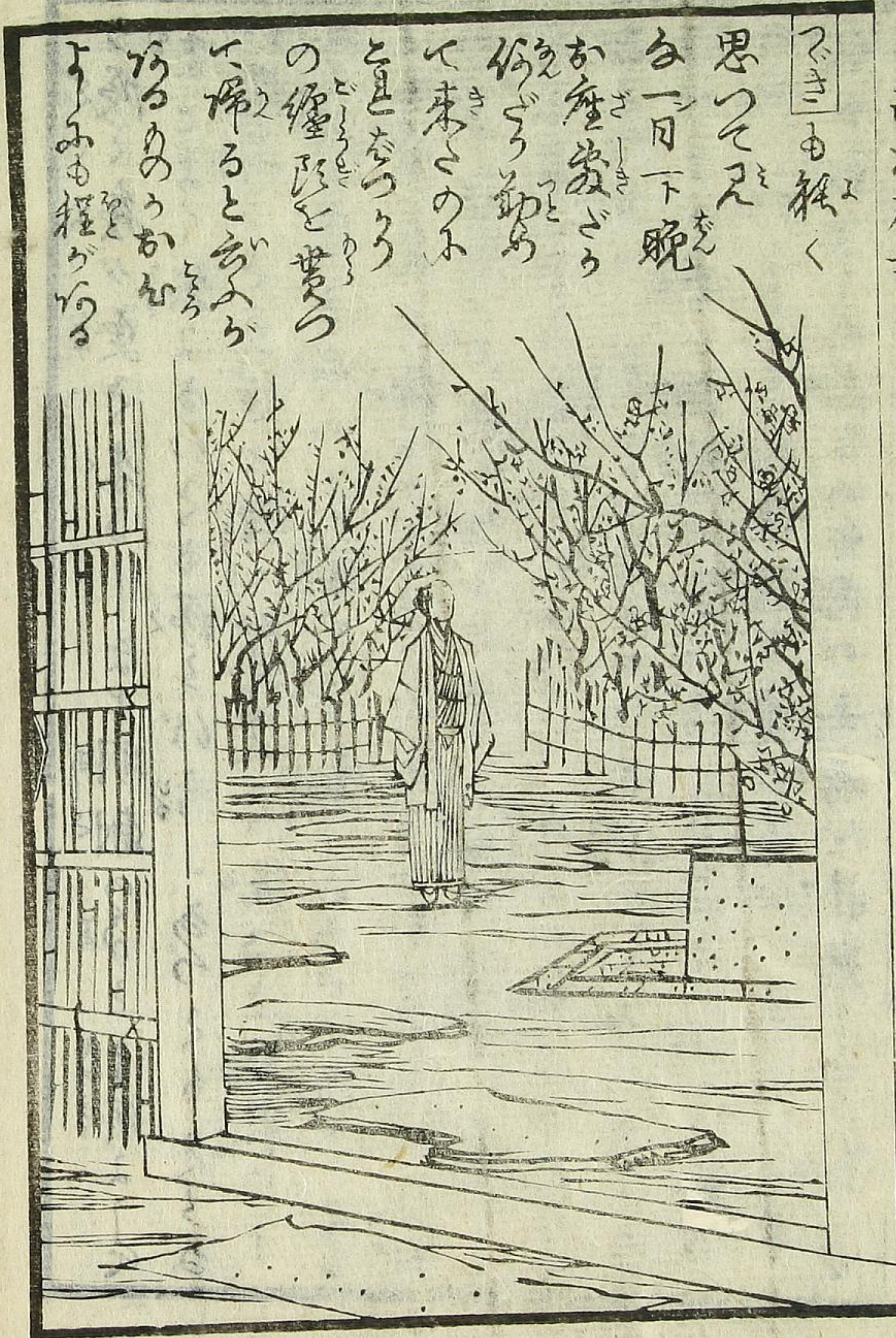
つぎ 岡が是とききては祝儀の外は
 一田二田の田をさき金で掃き
 我修よとらふ物とらふ
 判へ急くある一終あやア
 つらは新實で魂名と舞
 むるやうなるみぐ出来
 るく心能へする物の
 とうせ今時の藝妓の藝を
 舞ひく佳を賣るとあふ
 のの習志
 流はよ今



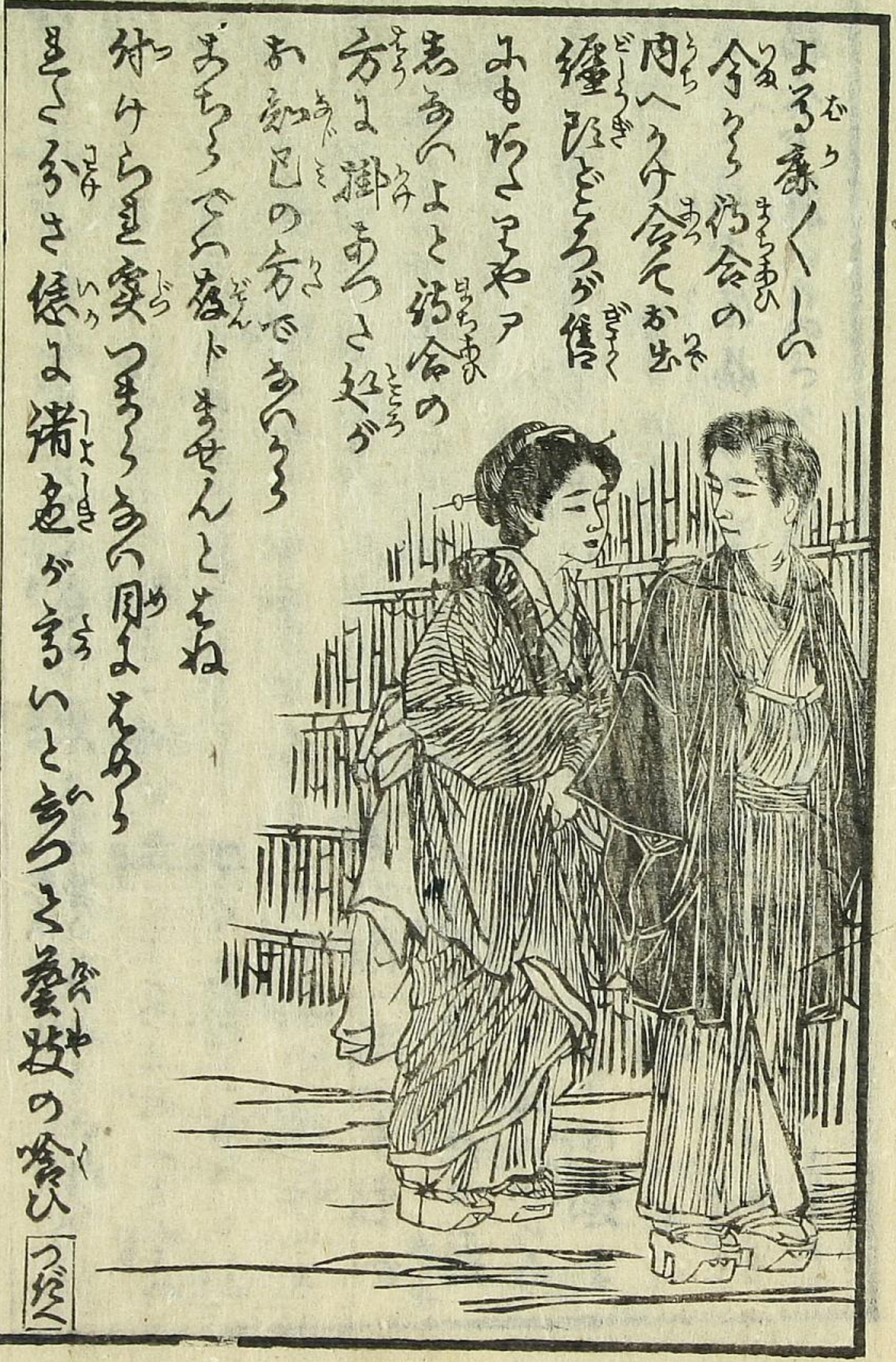
△込をわら
 て抱へ人の
 為あやア
 あるの
 ぞろ
 尻よ
 老まろの
 わくの瘦
 心死であら
 あいのヨまア親方固たまへ
 家のき助づこのる由
 みのだろろ
 分尻のからい
 のろを産
 出ら

つき 大動揺とさせやうと何れもはのかる結合うら
 かつてうら早くゆきぬえたとつとぬ出してやる
 とそ晩十二時まだよあつとも帰らあいのを連こん
 ぶ箱丁と関と生者ゆ居ぬくう女中とまのくや見え
 るとお客と一所よとつうか出よありまうと馳進明日の
 かりませうと墨り波膠と見えやうよあんやりうと
 返りゆで分らぬくうまうと揮てその客さぬいゆあこの
 かお色のちうと関せるとナニ今日始ゆくか出なまのうと
 の心かお色ぢやアゆりませんとあふううまはわア込ッ
 と物ご意助ゆあんまうま枝子ご知己でも縁人客よ
 連はられろゆり歩ゆといゆたきと者ごとあつとあ

がぼく夜が更え来るうまア明朝のゆと生後ようと
 金とよく物よあつとも帰らば魚よあつともあつとも
 い備固ッとのめごと種くかんぐろと居るとそ晩の十
 時ゆよヤッと帰つて来るうら動しとのめと関く居る
 とお客さんと梅とるよまありまうとお客人それい今日
 の事だらううら動しとのめ小梅の宿屋へゆゆ
 今日亀井戸の橋と見えとるうら本屋の温泉で今ま
 抱んでまうう車ゆりつこのでままお客いどう
 木のとお客の温泉で別とまうとヨリと見ゆうか
 の内へゆゆと一円煙頭と費つてゆりまうとヨと平
 気な顔をして居るゆ肉の女房と積懸とあうか



つぎも紙く
 思つてえ
 な一日下晚
 お座敷ごう
 何ごう御あ
 て来このふ
 ことなつら
 の纏路と世の
 て帰るとあふ
 巧るのうかむ
 よふも程がら



よる森くく
 今うり
 内へうひ合えお出
 纏路とらか信
 みゆりてまわア
 志あへよと結合の
 方と掛あつと処が
 お知己の方であらう
 まちうでらなトませんともね
 知けらま突つまらあつ月よまら
 是ご分さ係よ備是か言いとまらと巻妝の喰ひ

つた

つぎ 逃げまんぞと人の氣の悪さま驚きやとわん
 だうもつうの物と一件となくしと今
 むる馬鹿な目よとあらまう一壁くあらと今
 の中輪と逃そやうな事ゲらるのを心配で
 まさ可笑いのうらるぜとやア或家の抱へ
 女房さんがふだんの世一は今所のお客の
 一浪るんぞとんまよ金づらるやうな町人
 わんヨまんぞも聲のまか客がまんとう
 叶のそやうも 他人のまよ渡さあやうは
 まりて後で後悔する事ゲらるよ前
 都合が終りのぞがた其く性まのう
 深世のうらるまう

イトお国ヨお客へ終が終ひと今人の
 と思ふヨ終に終あやアあんまわと一
 終ひぢやアあいう一でらうの大ま
 とりてれよ一だらうお客へ終は終
 ぶよとお女房さんが襟袵は感腹一
 の抱へる腕系の小料理茶屋の
 客が客をさけひて終は終は終は終
 思つてその男の素性を知くと何よ
 て終つてその男の素性を知くと何よ
 終つてその男の素性を知くと何よ
 終つてその男の素性を知くと何よ
 終つてその男の素性を知くと何よ

小料理屋へおしやうと右の格束サその性一紙
 同とか女房さんで残まがらさぶんまぶらたらうき
 へ航よつまきまきやうみ程つたで間接の隊長と仲居の
 扱ふお女ア笑ひまゝ一実上特閑だつてヨ
 を一己の善うねまぢやアやつと頂戴とこのさたんよ
 入り兼るの所売所の来高まぐら規則以段正のその
 お橋様引多訂仲買の代理のそとあり一北園を其者
 とて向入るまきまき生まきまき親方ごうとね所の
 で一入らつたあいま一サア此方へお掛あま一お後らま
 浮山備うまあやう一まナ二松たつそんあふ怒をう
 ありでもあがりまふ一七居りやア金よ不自由いあね

のぶらまきまき人の備けをてもあうまねくう又一ま
 を成出して込るの計脱は昨日のりヨごうも公債の相
 場が額が重し洋銀や銀貨と比較をしごころりさ
 が紙人と思つてごう券付まふよ二千枚をり賣り
 飛を一見見たらうジツト是ありが中目よきて是りう
 小締りまきまき二番うらひまらと安うらうとあひの
 外大子の実注文があつたんだらう何サ本場の商ひら
 十四又儀もを孫おげと意外の丈敷場でチヨツトのる
 一六百圓をう摺り潰しサむも早くあり久とのを今
 目ハ勘り取らう一や一とが米と遠ツと公債の足
 ありもさつたり引きあはるまきまき異る物サ
 づ

つぎ 米道で下れた込んばりの騒ぎ

あやアそんなふ馬麻る膏

法いああいが此言のやう

よきやこのふ大阪の電

報よ連もるのふやア

速急ごせ僕あんぞが

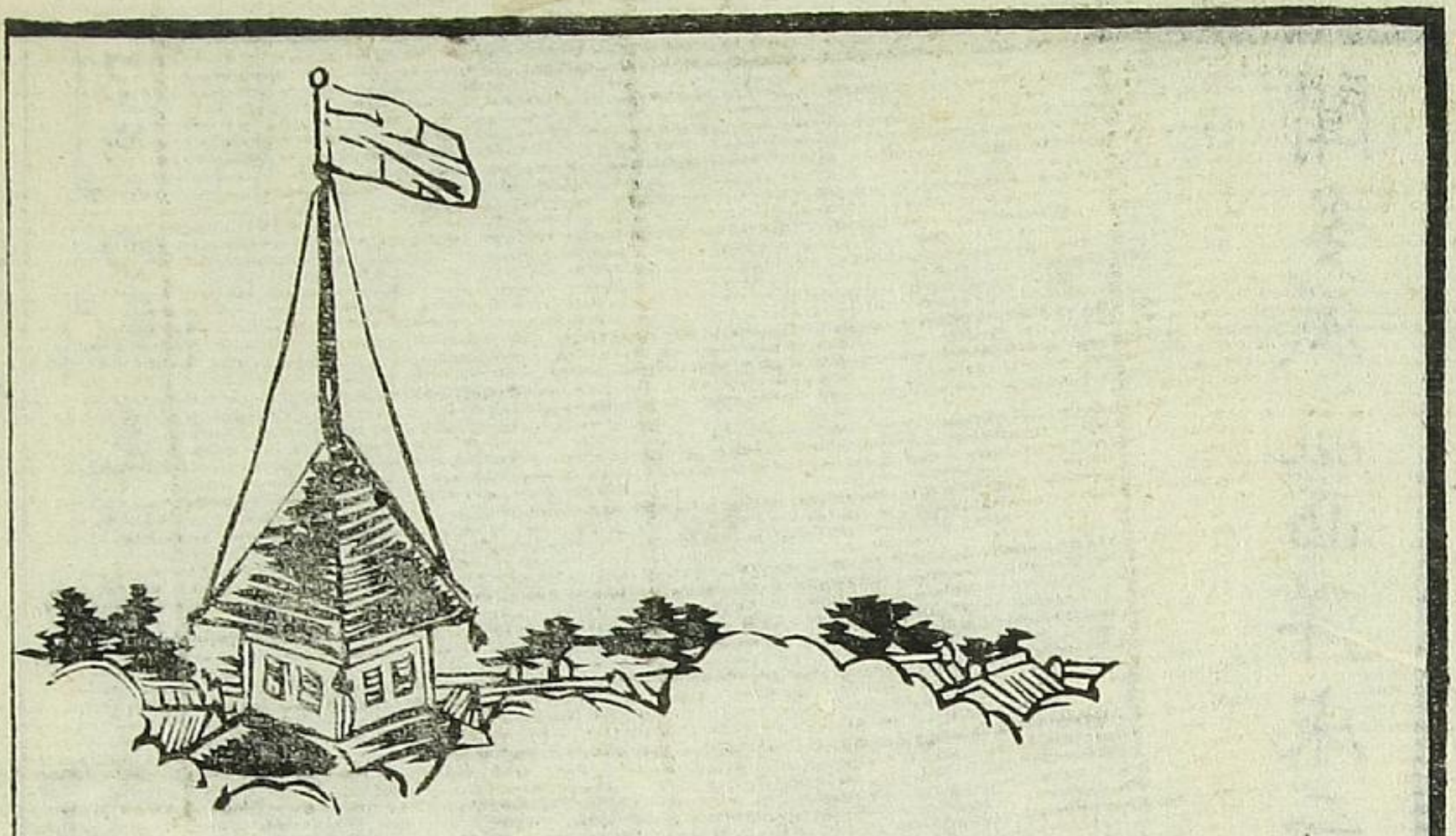
考へて知でん米い大阪が

件ぶうう彼地のの配よ

うらと誰か言下のちるのん理の

高松ぶが公使いからつちやア

阪地より東京が品も候



慶よのるぶうう此地の電報で

阪地の電報が生息そらうみ築ぶが

何所も阪地の電信よあわつてきて

居るのん實よ東京の和ぢやアおん

うたうう報が各員よあつて居る

のサせんでへ東京の商人の商賣

ガ下なぶうう終て撥きとさま

るのサをゆ此地の仲るふやア

膝玉のぞらうう者が居候へ

うらこのサ矢下の線平とら

とら一個で意張とあぶらう

つげ



聞多

西^其洋^{やう}

風流

床^{とこ}

戴編

櫻雨園主人著

松齋吟光画

金松堂

上梓

